

敦煌写本に見られる道氤撰の「願文」について

定 源（王招国）

はじめに

筆者はかつて敦煌写本を用いて、唐代沙門道氤の伝歴の検討とその代表作と言ふべき『御注金剛般若經宣演』（以下、『宣演』）の復元を試みた¹⁾。『宋高僧伝』巻五所収の「道氤伝」によれば、彼は十種、二十余巻の著述を作ったという。この中には、開元十五年（727）に亡くなった一行禪師を悼むために撰述された「導文」があり、天下に流行したと伝えられている。即ち「仍属此際，一行遷神，勅令東宮已下，京官九品已上，並送至銅人原藍田設齋。推氤表白，法事方畢。宰相張燕公說執氤手曰，釈門俊彦，宇内罕匹，幸附口録向所導文一本，置于篋笥。由是其文流行天下也」（仍お，此の際，一行の遷神に属って，勅して東宮已下，京官九品已上，並びに銅人原の藍田に送り至って，齋を設け，氤を推して表白せしむ。法事方に畢れり，宰相の張燕公説は氤の手を執して曰く，釈門の俊彦，宇内に匹べること罕し，向の所の導文一本を口録し，篋笥に置く附けば幸いと。是に由って其の文は天下に流行するなり）²⁾と記録されているのがそれである。この「導文」については，現在に至るまでその存在が確認されていなかった。

本稿では，まず，敦煌写本 P.3535v に見られる道氤述の「大唐開元十六年七月卅日勅為大惠禪師建碑於塔所設齋讚願文」（以下，「願文」）に着目し，それを中心にして同テキストとされる P.4072 と P.2547 を取り上げ，「願文」のテキストを復元する。次に，「願文」の撰述背景を検討した上で，当該文が前述した「導文」そのものである可能性を論じる。最後に，「願文」の内容を説明しつつ，当該文の資料的価値を明らかにする。

1. 「願文」の敦煌写本とテキストの復元

現在，「願文」の敦煌写本はペリオ本の P.3535，P.4072 及び P.2547 の三本が確認されている。

(44) 敦煌写本に見られる道氤撰の「願文」について (定 源)

P.3535 は、両面書写、①正面：首尾欠、全 43 行、内容は「書儀」。②背面：首尾欠、全 39 行、前八行は別の願文で、第九行と第十行の間に「願文」の題名に続き「大薦^マ詎福寺沙門道氤述」という撰号が見え、そこから最後の「聯輝於家祚」までが道氤の撰述と思われる。書写の形式は、上下に界線あり、一行あたり 27 ～ 31 字。その筆跡から見ると、正面の「書儀」とは同一人の書写であると推測される。

P.4072 は、四つの断簡あり、「願文」にあたる箇所は第二の断簡である。首尾残、全 23 行、中間の上部を欠損している。「□敏恵之」から「齊登覺道」までを存す。書写の形式は、上下に界線あり、一行あたり 27 ～ 31 字。行間には別筆で訂正した文字が何箇所か見える。

P.2547 は、両面書写。①正面：二十七の断簡あり、「願文」にあたる箇所は最後の断簡である。全 4 行、「而論則我大唐」から「潔己則大迦□」までを存す。第一行と第四行の後半部分を欠損している。中間の二行から見て、一行あたり 32 字前後とされる。書写の形式は、上下に界線あり、前の断簡とは同筆・同形式と見られるため、そもそも一具のものであると考えられる。②背面：首尾残、内容は「戸籍制」(擬)、天宝六載(747)の識語が見える。当該写本の正面内容に関しては、フランスの Paul Magnin (梅弘里) 氏をはじめ諸学の先行研究において、寺院備付の齋会文範である「齋琬文」と同定されている³⁾。つまり、「齋琬文」には「願文」も収録されていたことを示唆している。

上記三本のうち、P.3535v は現存する文字数が最も多く、かつ道氤述と明記されているので、頗る貴重な資料である。三つの写本を対照してみると、いずれも脱字・誤写を免れず、互いに校勘すべきところがある。例えば、P.3535v の「與日月俱縣」は P.4072 によって「與日月俱懸」と訂正すべきである。また P.4072 の現存箇所から、P.3535v の文末には「豎通三界、傍既四流、並出稠林、齊登覺道」という十六字を欠落していることが判明した。以上のように、P.3535v を P.4072 と対校することによって「願文」の全容を復元することが可能であるといえる。

2. 「願文」の撰述背景

「願文」の題目から見て分かるように、当該文は玄宗の勅命により大惠禪師の塔前に碑銘を建立し、齋供を設けた際に表白されたものである。日付は開元十六年(728)七月三十日である。大惠禪師とは、一行禪師の諡名である。『宋高僧伝』卷五所収の「一行伝」によれば⁴⁾、一行は開元十五年(727)九月、華嚴寺におい

て疾病を生じ、十月八日に新豊に赴く途中で示寂した。その後、遺骸を岡極寺にとどめ、詔によって長安郊外の銅人原に葬られ、玄宗から大惠禪師という諡号を賜わり、碑銘が製されたという。

周知のように、一行は禪・律・密教などの教学を修めたばかりではなく、曆象・陰陽・五行・医薬などの外典をも渉獵した。開元五年（717）、三十五歳の若さで玄宗に召出され、同九年（721）麟德曆の日蝕が不効となったため、勅命を受けて曆法を制作し、玄宗朝の国師となり、玄宗の厚遇を受けるに至ったのである。

賛寧が「一行伝」を撰述した際、玄宗撰の碑銘を参照したとされるが、碑銘そのものは中国ではすでに散逸してしまい、ただ空海の『真言付法伝』にある「一行伝」の末に付された録文によってその内容を窺うことができる。実は、宋・陳思編『宝刻叢編』巻八に「唐一行禪師塔碑」という著録が見え、塔碑の建立年次は開元十六年（728）であったことがわかる。おそらく「願文」の題名に見える「建碑於塔」の「碑」は玄宗撰の一行碑銘を指すに違いない。この御製の碑銘から、玄宗と一行との密接な関係が窺えるだけでなく、一行の生涯の活動・功績が高く評価されていたことをも窺える。

なお、碑銘の建立に関連して、『旧唐書』卷一九一「一行伝」には「至十五年卒，年四十五，賜諡曰大惠禪師…（中略）…上為一行製碑文，親書於石，出内庫錢五十万，為起塔於銅人之原。明年，幸温湯，過其塔前。又駐騎徘徊，令品官就塔以告其出豫之意，更賜絹五十匹，以蒔塔前松柏焉」という記録が見える。ここにいる「明年」とは、開元十六年のことである。その年、玄宗は温湯に行く途中で一行の塔に立寄り、そこで品官に命じて「出豫之意」、即ち秋日出遊の意を告げた。実際に、「願文」では当日のありさまを「是日也，朱律謝期，金風扇物。時雨泛灑，郊原肅清。天子御瓊，仗坐金閣。烟花乱色，幢蓋駢冷。鐘鼓鏗鉦，管弦曄皇。七衆悉来而道從，百神頂礼而踴躍」とも述べている。つまり、当日、秋らしい気候に、雨が降ったばかりの空気の清らかな郊外で、鐘鼓・管弦を奏鳴し、天子（玄宗）を始め七衆が集まり、行われた齋会の場面は盛大であった。この「願文」は恐らく上記の行幸の際に、一行の塔前の齋会の現場で作られたものではなかろうか。そうだとすれば、行幸の時期は同年の七月三十日に限定でき、当時玄宗に随行した品官とは、道氤、そして「願文」に見える「右丞相燕国公」・「常侍徐公」・「内侍尹公」等であったと考えられる。後二者は恐らく徐堅と尹鳳翔であろう。また「右丞相燕国公」が張説を指すことに異論はなかろう。一行の塔前の齋会の現場に張説が立ち会ったとすることは、前掲の『宋高僧伝』の記録と全く一致してい

(46) 敦煌写本に見られる道氤撰の「願文」について (定 源)

る。この点を含めて勘案すれば、「願文」は既述の天下に流行した「導文」そのものではないかと考えられる。

3. 「願文」の資料的価値

「願文」はその題名が示すように、主に一行の偉業を偲ぶことを目的とし、いわゆる一つの悼文であるため、哀情を込めながら多くの賛辞で飾られていることは当然である。文の前半では多くの美辞を用いて一行の徳行が詠えられている。例えば、「孔夫子之徳」・「遠法師之器」・「大迦葉之行」・「妙吉祥菩薩之事」という賛辞が呈されている。また、一行と玄宗との関係については、「契同魚水」の譬えをもって両者の親密性が端的に示されている。文の途中にある「悲夫」の二字から文の流れは変わり、それ以降、一行示寂の年月、御製の碑銘、齋会当日の天気とその場面、齋会の参加者、及び齋会の功德回向という順に述べられている。全文にわたってほぼ四六駢儷体で書かれ、格調の高い美文となっている。

さて、この「願文」の資料的価値について、少なくとも次の四点を挙げることができる。

(1)「願文」は31行ほどの短文に過ぎないが、道氤の著作が殆ど散逸してしまった現状において極めて貴重なものである。当該文は道氤の教学思想を反映する『宣演』のような経典の注釈書ではないが、一つの文学作品と言うべきもので、道氤の文学的才能を端的に示す資料として見てよからう。

(2)拙稿「敦煌文献より見られる唐代沙門道氤の伝歴」においても言及したが、「願文」によって道氤は開元十六年前後、大薦福寺の沙門として活躍したことが判明した。また「願文」には「右丞相燕国公」・「常侍徐公」・「内侍尹公」という三人の名が見られ、彼らは道氤との間になんらかの交流があったのではないかと考えられる。このうち、燕国公張説と道氤との交流についてはすでに『宋高僧伝』によって確認できる。以上のように「願文」は道氤の伝記研究にとって貴重な資料である。

(3)一行の伝記研究においても注目すべき資料であるといえる。「願文」は一つの悼文であり、一行の生前の功績を美辞麗句によって讃えたものに過ぎないかも知れないが、御製の碑銘に続いて、早い段階で成立したものであるので、そこに示された一行示寂の年月及び玄宗との関係などは貴重な記録である。

(4)「齋琬文」の成立年代を探る上で一つの参考資料となる。前述したように、P.2547によって「齋琬文」には「願文」も収録されていたことが分かる。これま

で「斎琬文」に関しては那波利貞博士をはじめ⁵⁾、多くの学者が取り組んできたが、「斎琬文」の編集者はだれか、何時頃編集されたか等、未解決の問題が残っている。特に後者の問題については学者の意見が異なっており、天宝元年(742)から至徳元年(756)、大暦五年(770)前後、開元元年(713)から同二十八年(740)等、少なくとも三説を挙げることができる。しかしながら、「願文」によってこの問題に解明の糸口を与えることが出来る。「斎琬文」に「願文」が収録されていたのであれば、その編集年次は開元十六年以降になるはずである。「斎琬文」の内容分類には「悼亡霊」という項目があり、更に「僧、尼、法師、律師、禪師、俗人、考妣、男、婦女」と細分化している。「悼文」とも言うべき「願文」は「禪師」の細目に収められるであろうし、「願文」の文体は、十分一つの範文となりうる。このため「斎琬文」に「願文」が収録されても、まったく不思議はなかろう。

おわりに

以上、敦煌写本における「願文」のテキスト紹介、内容の復元、またその撰述背景を検討した上で、「願文」は即ち『宋高僧伝』の「道氤伝」に記録される「導文」そのものではないかと論証した。ついで「願文」の内容構成を簡略に説明し、それに関する資料的価値を提示した。「願文」は『宣演』とともに、道氤の著作として敦煌地域に伝わり、現在敦煌写本のみが伝存している。『宣演』は敦煌仏教に大きな影響を及ぼしたことを確認できる一方、短い文章である「願文」はどれほどの影響力をもったのか、敦煌写本に見られるほかの願文作品とはどのような近似性があるのか等の問題が、今後の課題となる。特に「願文」と「斎琬文」との関係については更なる検討が必要である。

1) 拙稿「敦煌本『御注金剛般若経宣演』の復元について」(『印度学仏教学研究』第59巻第2号, 2011年3月, pp.32-25)。「敦煌文献より見られる唐代沙門道氤の伝歴」(『印度学仏教学研究』第60巻第2号, 2012年3月, pp.45-49)。

2) 『大正蔵』巻50, p.734c20-24。

3) Paul Magnin(梅弘里)「根拠 P.2547 号写本対斎琬文的復原和断代」(『敦煌研究』総第23期, 1990年5月, pp.50-55)。

4) 『大正蔵』巻50, p.733c1-24。

5) 那波利貞「仏教信仰に基きて組織せられたる中晩唐五代時代の社邑に就きて」(『唐代社会文化史研究』, 創文社, 1974年2月, pp.575-673。原載『史林』巻24第3・4号)。

〈キーワード〉 道氤, 敦煌写本, 願文, 斎琬文, 一行禪師

(国際仏教学大学院大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究員, 文博)